

国語科授業における子どもの情意面の高まりに関する基礎的研究 — 「教育科学国語教育」誌, 「実践国語研究」誌をもとにして —

田 中 拓 郎

十和田市立大不動小学校

要 旨

日々の実践において、稿者は子どもたちの学習意欲の乏しさに悩ましさを感じている。

確かに文科省は戦後一貫して学習指導要領などを通じて、「関心・意欲・態度」といった情意面の大切さを示してはいる。しかし、実践の立場ではそれらをどのように具体的に進めていけばよくわからないのが現状である。

そこで、先行研究にあたり、先達の教師達はどのように子どもたちの情意を喚起しようとしているかを、一般の教師にも広く読まれている二誌の国語教育雑誌をもとにして調査した。

その結果、情意に関する先行研究の数は新学力観が登場した後に急に増えていることがわかった。そのことは情意面に教師が配慮しようとしていることを示す。また、先行研究を調査するうちに、九つの要因（「A. 教材文」「B. 教師のことば（発問、助言、指示など）や姿勢」「C. 動機づけ」「D. 学習方法」「E. 学習形態」「F. 言語活動」「G. 単元構成の工夫」「H. 評価」「I. 言語環境、言語生活」）で分類することができた。その中で「A. 教材文」に関わる論文は少なく、ほとんどが「B. 教師のことば（発問、助言、指示など）や姿勢」以下の教師の指導法に関するものであった。教師が子どもに指導するという視点では当然のことかもしれないが、教師と子どもの媒介となる教材そのものをどう読み、どう考え、どう与えようかという教材レベルについて立ち戻ってみる必要性があるのではないか。また、子どもの情意には質的なレベルがあり、子ども自身が自己をメタ認知できるように教師が意図的に仕組まなければ表面的な「関心・意欲・態度」になる可能性がある。

【キーワード】 情意 関心・意欲・態度 要因 子どもの内面

1. はじめに（問題の所在）

現場の一実践者として、日々の授業で一番悩ましく感じていることは子どもたちの「学習意欲」の乏しさである。いわゆる「やる気」である。もちろん全ての子どもたちに学習意欲がないというのではないが、受動的な学習態度の子どもたち、「やる気」が感じられない子どもたちが多いのも事実である。そこで、子どもたちの発達や実態に即した手だてを講じてみるものの、その場その時は興味・関心を持ち学習に向かおうとするが、時間の経過とともに意欲が減退していく。

確かにこの「学習意欲」の問題は、永遠の教育課題とでもいうべき性質のものなのかもしれない。戦後の学習指導要領の目標・ねらいには、必ずこの「学習意欲」に関する情意のことが示されている。文科省は子どもの情意を高めるためにそれなりの方策を講じたであろうことは想像に難くない。それにも関わらず、この子どもの情意に関する問題は解決をみていない。

そこで稿者は、重要性・必要性をわかってはいるがどのようにしたらよいのか方向性を明確に見いだせない、この子どもたちの情意の問題に対して先行研究に立ち返ってみてはどうだろうかと考えた。なぜなら先達の教師達もこの情意の問題に対して何かしらの取り組みをしたことは確実であろうからである。先達の教師達はどんなことに留意し、子どもたちの情意を喚起しようとしたのかを探り、何かしらの方向性を見いだすことは、日々の授業を行っている私たち教師にとっては意味のあることではないかと考えた。

2. 研究目的

国語科授業において、子どもの学習意欲、興味・関心・態度といった情意的側面が喚起

される要因は何であるかを国語科教育雑誌をもとに調査し明らかにしていく。

3. 研究方法

3-1 調査・分析対象、調査期間

全国の国語教師が執筆し、かつ一般書店で広く販売されている国語教育雑誌を対象とする。また民間教育団体発行のものではなく、一般の教師も広く執筆しているものにする。そのことで、指導観、指導方法に偏りがなく、より一般的・具体的な傾向がわかると考えるからである。具体的には「教育科学国語教育」誌（明治図書）、「実践国語研究」誌（同じく明治図書）を調査対象とする。

なお調査対象期間は、関心・意欲・態度といった情意的側面が大きくクローズアップされた新学力観が登場した平成元年度（1989年）から現在まで（2009年）とする。

3-2 調査・分析の手順

論文調査の仕方としては次の手順で行う。

- ①二誌の論文のタイトルに「関心」、「意欲」、「態度」という言葉がある論文を調査し一覧表を作成する。
- ②個々の論文を精読し、情意面を高めていくには何が有効であるのかその要因について調査する。その際、一つの論文に複数の事例、複数の要因があることが当然予想されるが、その場合は一番明確に示されている事例、要因を取り上げる。
- ③調査結果をもとに関心・意欲・態度が大きく喚起される要因について考察し、教師は子どもの情意面の高まりのためにどんな要因を重要と考えているか考察する。

4. 分析の結果

平成元年度（1989年）から現在までの「教育科学国語教育」誌、「実践国語研究」誌（ともに明治図書）を調査した。「関心」、「意欲」、「態度」といった情意的な言葉が題名として示された研究論文は全部で173編ある。（注 個々の研究論文名については別紙資料編参照）

4-1 研究論文を概観する

「教育科学国語教育」誌と「実践国語研究」誌における研究論文の年代別発表数は下記の通りである。

表1 年代別「関心」「意欲」「態度」研究論文数

誌名 年代	教育科学 国語教育	実践国語 研究	合計	学習指導要領	教育の流れ
1989	4	0	4	平成元年度版告示 ↓ (1989)	☆新しい学力観 学ぶ意欲・関心・態度の重視(1989) ☆指導要録の改訂 「関心・意欲・態度」を最上位の観点として位置づける(1991)
1990	2	8	10	↓	
1991	1	3	4	↓	
1992	5	3	8	↓ 平成元年度版施行 (1992)	
1993	13	12	25	↓	
1994	11	8	19	↓	
1995	10	5	15	↓	

表1より1993年から1997年までの5年間で論文数が多いことがわかる。その理由として考えられるのは、興味、関心、態度、意欲を重視した新しい学力観に基づいた平成元年度版学習指導要領が実施されたこと、指導要録改訂により「関心・意欲・態度」が観点の最上位に位置づけられたことによるとと思われる。文科省による情意面の強調による教師の情意面に対する関心が高まったことが論文数の増加につながっていると考えられる。反対に論文数が少ないのは2005年以降である。確かな学力の考え方、平成20年度版学習指導要領のよる学習内容の増加などにより、情意面以上に知識・技能などの認知面に対して教師の関心が向かったことによるものと思われる。

(1) 子どもの情意面を高める要因

鈴木誠氏は授業を大きく分けると「目標」「授業形態」「評価」「授業方法」「資源（教材）」「授業計画」の六つの要因に分けることができると述べている⁽¹⁾。そこで鈴木氏の分類を基にして各研究論文を調査したところ、稿者は論者が子どもの情意を高めるための要因として表2に示す九つの要因に分類できた。それは「A. 教材文」「B. 教師のことば（発問、助言、指示など）や姿勢」「C. 動機づけ」「D. 学習方法」「E. 学習形態」「F. 言語活動」「G. 単元構成の工夫」「H. 評価」「I. 言語環境、言語生活」である。鈴木氏と稿者との各要因の関係は表2の通りである。

表2 子どもの情意を高める要因

鈴木氏の授業の要素	田中が考えた要因
目 標 授業形態 評 価 授業方法 資源（教材） 授業計画	A. 教材文 B. 教師のことば（発問、助言、指示など）や姿勢 C. 動機づけ D. 学習方法 E. 学習形態 F. 言語活動 G. 単元構成の工夫 H. 評価 I. 言語環境、言語生活

鈴木氏と大きく並びが違うが、稿者がAからIのように示したのは、「A. 教材文」は教材レベルであり、「B. 教師のことば（発問、助言、指示など）や姿勢」から「C. 動機づけ」「D. 学習方法」「E. 学習形態」「F. 言語活動」「G. 単元構成の工夫」「H. 評価」「I. 言語環境、言語生活」までは教師の指導法レベルとして考えたことによる。

（2）研究論文はどの要因を示しているかの調査結果

では次に各研究論文を具体的に分析していく。個々の教師が「関心」、「意欲」、「態度」といった情意面を高めていくには、どんな要因が有効であると考えているのかを調べてみたのが下表である。（なお、どの要因にも入らないものもあった。その場合は下表の論文数にはいれていない。）

表3 子どもの情意面を高めると考えられる要因と各論文のキーワード

要 因	論文数	論文のキーワード
A. 教材文	3	「筆者の考えに共鳴し、自分も類似した見聞に基づいて書いてみたくなってくる」(1.加部) 「文章そのものに引かれて、心を揺さぶられている」(70.遠藤) 「教材を不満自覚の高い少し難しいものにする」(154. 野口)
B. 教師のことば（発問、助言、指示など）や姿勢	26	「やる気のでる発問」(35.有村) 「拡散的な発問、知的葛藤を起こさせる発問」(56.八田) 「意欲段階というものを一律にだけじゃなくて、その意欲の曲がり角を注意していく指導は、気づかせる指導など個に応じてある」(32.須田) 「学習への関心・意欲・態度は、指導者の適切な支援によって育つ」(44.杉田) 「意欲の出るほめ言葉のかけ方にも学ぶことが多い」(72.深川) 「意欲的に取り組んでいる姿を目標にするのではなく、意欲的に取り組んでいる姿を、生徒自身が実感し、「自分は意欲的に取り組めたのだ」という自信を持たせること」(93.陣川) 「とっさの支援」(94.迫) 「褒めて次への意欲をかきたててやればよい」(126.小林) 「子どものよさを見逃さないこと」(133.吉永)

C. 動機づけ	2 5	<p>「たからもの」(46.蛭川)</p> <p>「輪回し遊びを体験し、感動を話し合い、説明文を書く必要感をもつ」(80.桑原)</p> <p>「小動物を観察しその行動などに疑問を持つ」(82.眞瀬)</p> <p>「何のために、誰にをはっきりさせる」(61.平松)</p> <p>「詩の音読活動を発表会という様式で行いたい」(89.蟹沢)</p>
D. 学習方法	2 1	<p>「学び方を身に付けつつ、自分とのかかわりで読むようにさせ、意欲的に読めるようにしたい」(22.柏村)</p> <p>「子ども達が意欲的に取り組む学習は、学び方がわかり自分を表現することができ、新たな興味が持てた時である」(52.安原)</p> <p>「一教材の中で、授業の組み立てをパターン化し、表で常掲しておく、最小の指示で生徒が動くことができ、生徒自身の満足度も高かった」(58.戸根)</p> <p>「作成(稿者注 学習記録のこと)を通して、生徒は自らの学習過程を振り返り、日々の授業や家庭学習における努力や意欲を評価でき、次の学習への意欲を喚起することができる」(124.山崎)</p> <p>「辞書を開いて見つけた言葉や調べた言葉を付箋に書く、そして、そのページに付箋を貼っていく」(144.井関)</p> <p>「司書教諭と学級担任の連携指導」(155.藤島)</p> <p>「どうすれば書くことができるか、その方法がわかること」(159.西辻)</p>
E. 学習形態	1 2	<p>「4つの課題別にコース分けをした」(22.柏村)</p> <p>「多様な学習スタイルを考慮した学習コースを設定し、それを子どもが選択することで意欲をもって学習をすすめていく」(27.八木)</p> <p>「課題追究型の学習過程、個人学習(一人学び)と相互学習(学び合う)にしぼって、学習意欲とのかかわりを検証」(74.三浦)</p>
F. 言語活動	4 0	<p>「「意欲」を育てるための学習活動を考える」(43.梅澤)</p> <p>「ただの鑑賞に終わらず、出てきた言葉を使わせたり、自分なりの解説文を書かせたりしたことで、子どもたちの意欲を高め、主体的な読みにつながった」(49.古庄)</p> <p>「群読という学習活動をすることによって、群読という表現活動に更に深い関心や意欲を抱いたり、群読に限らず、広く表現するという活動に対して関心や意欲を燃やしたりすることであらねばならない」(77.高橋)</p> <p>「友達と対話のよさを伝え合う活動を学習プロセスに位置付け、学習意欲を継続し、対話の楽しさを味わえるようにした」(158.石川)</p> <p>「個々の伝え合う活動を取り入れた学習指導が、「国語への関心・意欲・態度」を高めるものである」(162.大林)</p>
G. 単元構成の工夫	1 4	<p>「二つの教材を関連させる」(28.戸田)</p> <p>「伝記教材は、他から教材を持ち込んで単元を構成した方が、子どもの関心・意欲を高めて、多読が生まれていく」(60.庭野)</p>

		「単元構成を根本的に変える」(121.庭野)
H. 評価	1 3	「診断的評価から始める」(4.浮橋) 「観察法, 問答法」(104.井上) 「自己評価や相互評価の導入」(105.大熊) 「教師や友達の賞賛や励ましが重要」(152.栗本)
I. 言語環境, 言語生活	8	「国語教室における言語環境の場合の人的環境としての教師 の言葉遣いや教師の板書など」(2.大熊) 「普段の何気ない言語生活に気をとめ, ことばの問題として 考えていこう」(140.西田)
計	162	

(3) 各要因の具体例から

次に各要因の意味と論文では実際にどのようなキーワードで表しているか示すことにする。

A. 教材文

「教材文」とは子どもが学習する素材としての文章である。教科書の教材文, または授業者の持ち込みの文章などが考えられる。これらの文章のもつ内容(作者・筆者の考え方や書きぶりといった論の進め方)が子どもの情意面を高めるとする場合があると稿者は考えた。3編見られた。

具体的に見ていくと, 研究論文では表3のキーワード欄に示すように, 「筆者の考えに共鳴し, 自分も類似した見聞に基づいて書いてみたくなってくるのである」(1.加部)と加部は筆者の考え方が子どもの意欲を高めると示している。また, 遠藤は「文章そのものに引かれて, 心を揺さぶられている」(70.遠藤)と教材そのものに対して生徒の思いが高まり, 学習への意欲を導くとしている。さらに野口は「教材を不満自覚の高い少し難しいものにする。」(154.野口)と述べ, 教材そのもののレベルを上げることで子どもの興味・関心が高まっていくであろうと述べている。いずれも教材という素材のもつ魅力, 価値について言及している。

B. 教師のことば(発問, 助言, 指示など)や姿勢

「教師のことば(発問, 助言, 指示など)や姿勢」とは, 教師の指導・助言・指示などの言葉かけや子どもに対する教師の姿勢である。具体的にはそれは発問であり, 子どもに対する助言であり, 教師の子どもに対する指導を含めた態度とでも言い換えることができる。ここでは全部で26編あった。

その中で「発問」に関しては8編あった。論文の中では「やる気のでる発問」(35.有村), 導入の関心をもたせる段階では子どもの見方・考え方を広げる「拡散的発問」が, また展開の意欲を高める段階では「なぜ」「どうして」などのような子どもの「知的葛藤を起こさせる発問」(56.八田)が子どもの情意を高めることに効果的であることを示している。

指導・支援・助言や教師の姿勢に関しては18編あった。教師の指導を意図的に行うことで子どもの情意を高めようとするに関して「意欲段階というものを一律にだけじゃなくて, その意欲の曲がり角を注意していく指導は, 気づかせる指導など個に応じてある」(32.須田), 「子どものよさを見逃さないこと」(133.吉永)がある。また「意欲的に取り組んでいる姿を目標にするのではなく, 意欲的に取り組んでいる姿を, 生徒自身が実感し, 「自分は意欲的に取り組めたのだ」という自信を持たせること」(93.陣川)といった子どもが自分自身をメタ認知できるような教師の取り組みを求めている論文も見られた。言葉

がけに関しては「意欲の出るほめ言葉のかけ方にも学ぶことが多い」(72.深川)、「褒めて次への意欲をかきたててやればよい」(126.小林)があった。教師の発言や振る舞いが子どもの情意に関して大きな影響を与えることを示しているといえる。

C. 動機づけ

「動機づけ」とは、子どもが学習したくなるような事柄・事象を提示することで情意を高めていこうとすることである。この「動機づけ」に言及している論文は25編あった。

各論文を見ると、この事柄・事象には二つの提示の仕方がある。一つは事前に具体物を示したり具体的な行動を行わせたりすることで学習に対する情意を高めていこうとするやり方である。もう一つは学習後に何をするのかを明確に示すことで子どもの学習意欲を高めていこうとするやり方である。

事前に具体物を示したり具体的な行動を行わせたりする例としては、小学校1年生の作文の時間に子どもに家庭から自分の「たからもの」を持ってこさせ、それを友達同士「たからものじまん」をし作文に生かす(46.蛭川)、「輪回し遊びを体験し、感動を話し合い、説明文を書く必要感をもつ」(80.桑原)、「小動物を観察し、その行動などに疑問を持つ」(82.眞瀬)ことで子どもの意欲を高める例があった。

次に学習後に何をするのかを子どもに明確に示すことで学習意欲を高めようとするやり方として、例えば子どもに「詩の音読活動を発表会という様式で行いたい」(89.蟹沢)と伝えることで、学習の最終ゴールが見え情意面が高まると期待している実践があった。

D. 学習方法

「学習方法」とは、一単位時間又は一単元の指導の仕方を工夫することで子どもの情意を高めていこうとするやり方である。学習展開の工夫ともいえる。また、子どもに学習の仕方(学び方)を具体的に提示することでもある。スキルを学ぶことでもある。これらにふれた論文は全部で21編見られた。

学習方法の工夫としては「辞書を開いて見つけた言葉や調べた言葉を付箋に書く、そして、そのページに付箋を貼っていく」(144.井関)といった例があった。また、「司書教諭と学級担任の連携指導」(155.藤島)といった工夫した指導も見られた。

学び方を学ぶという視点からは、「一教材の中で、授業の組み立てをパターン化し、表で常掲しておく、最小の指示で生徒が動くことができ、生徒自身の満足度も高かった」(58.戸根)実践があった。また「学び方を身に付けつつ、自分とのかかわりで読むようにさせ、意欲的に読めるようにしたい」(22.柏村)、「どうすれば書くことができるか、その方法がわかること」(159.西辻)といった学び方にふれている実践も多々見られた。

また、「作成(稿者注 学習記録のこと)を通して、生徒は自らの学習過程を振り返り、日々の授業や家庭学習における努力や意欲を評価でき、次の学習への意欲を喚起することができる」(124.山崎)は子どもが自分の学習を振り返るといったメタ認知的な学習方法を示している。指導方法というと得てして具体的な方法になりがちであるが、この例のように子どもの内面に関わる学習方法も大切であるといえる。

E. 学習形態

「学習形態」とは、ペア学習やグループ学習、コース別学習などといった教師の意図的な学習形態、学習スタイルを提示することである。12編見られた。

ペア学習やグループ学習を行った実践には「課題追究型の学習過程、個人学習(一人学び)と相互学習(学び合う)にしぼって、学習意欲とのかかわりを検証」(74.三浦)した例があった。また、コース別学習を示した例は「4つの課題別にコース分けをした」(20.仲谷)、「多様な学習スタイルを考慮した学習コースを設定し、それを子どもが選択することで意欲をもって学習をすすめていける」(27.八木)とした実践がある。子どもの意欲を高めるための指導スタイルの工夫がなされている。

F. 言語活動

「言語活動」とは、「話す・聞く」「書く」「読む」といった一連の言語活動を示す。全部で40編見られた。

各論文を見ると、「意欲」を育てるための学習活動を考える(43.梅澤)とあるように子どもの情意を育てるために学習活動を組織しようとしていることがわかる。具体的な活動としては、「ただの鑑賞に終わらず、出てきた言葉を使わせたり、自分なりの解説文を書かせたりしたことで、子どもたちの意欲を高め、主体的な読みにつながった(49.古庄)」、「群読という学習活動をすることによって、群読という表現活動に更に深い関心や意欲を抱いたり、群読に限らず、広く表現するという活動に対して関心や意欲を燃やしたりすることであらねばならない(77.高橋)」、「友達と対話のよさを伝え合う活動を学習プロセスに位置付け、学習意欲を継続し、対話の楽しさを味わえるようにした(158.石川)」、「個々の伝え合う活動を取り入れた学習指導が、「国語への関心・意欲・態度」を高めるものである(162.大林)とあるように話す・聞く活動、書く活動、読む活動が行われている。上記以外にも話す・聞く活動、書く活動、読む活動を融合的に取り入れたパネルディスカッションなど多様な活動が示されている。

G. 単元構成の工夫

「単元構成の工夫」とは、教師が単元構成を工夫することで子どもの情意面を高めていこうとするやり方である。学習計画の工夫ともいえる。この「単元構成の工夫」に言及している論文は14編あった。例えば、「二つの教材を関連させる(28.戸田)として、民話という視点から「吉四六話」(民話)を学習した後、「方言と共通語」(説明文)を学習し民話の中の方言の働きを深め、さらに現代の民話(松谷みよ子「現代民話考」)を聞き、その後オリジナルの民話を書くという学習があった。また「単元構成を根本的に変える(121.庭野)学習計画として、宮沢賢治の作品を十分に読書させた後「やまなし」を詳しく読むといった「読書から読解へという新しい単元構成(121.庭野)もある。いずれも教材の扱いに何かしらの工夫を加えることで子どもの情意を高めようとするやり方である。

H. 評価

「評価」に関しては13編見られた。「評価」には「教師の評価」により子どもの情意が高まるとする考え方と「子ども(自己または他者)の評価」により情意が高まるとする考え方がある。前者は事前に子どもの実態を把握してから授業に臨む「診断的評価から始める(4.浮橋)ことや、教師の学習時における「観察法、問答法(104.井上)などといった形成的評価などがあった。後者は「自己評価や相互評価の導入(105.大熊)といった子ども自身、または子ども同士による評価である。いずれにせよ、「教師や友達の賞賛や励ましが重要(152.栗本)といった「評価」が子どもの情意を高めていくことは効果があると考えられる。

I. 言語環境、言語生活

「言語環境、言語生活」とは、子どもの身の回りの環境や子どもの日常生活での働きかけが子どもの情意を高めていくとする考え方である。全部で8編見られた。

「国語教室における言語環境の場合の人的環境としての教師の言葉遣いや教師の板書など(2.大熊)に気をつけさせることや「普段の何気ない言語生活に気をとめ、ことばの問題として考えていこう(140.西田)とすることで子どもの情意を高めていこうとしている。さらに具体的な例として表3には示していないが、「朝の読書(130.佐藤)」、「壁新聞コーナー(146.増田)」、「読書カードの工夫、学級文庫の充実(170.細見)」などがあり、それらを展開することで子どもの意欲を高めていこうとしている。

(4) 表3及び各論文の具体例からわかること、考えられること

研究論文をもとに子どもの情意を高めるための要因について考えてきた。表3及び各論

文の具体例からわかること、考えられることは下記の2点である。

①授業は、教材を媒介として教師と子どもとの関わりで成り立っていると考えると、九つの要因は教材に関する「A. 教材文」と、教師の指導に関する「B. 教師のことば（発問、助言、指示など）や姿勢」「C. 動機づけ」「D. 学習方法」「E. 学習形態」「F. 言語活動」「G. 単元構成の工夫」「H. 評価」「I. 言語環境、言語生活」の二つに大別できる。また、この分類で考えると、圧倒的に教師の指導に関する要因が多い。教材に関する要因である「A. 教材文」はわずか3編のみであった。つまり、教師の指導法という視点で子どもの情意を高めようとしていることがわかる。確かに授業者は教師であるから指導法に関するものは多いのは当然であろうが、教師と子どもを取りなす「教材」そのものを教師がどう読み、どう考え、どう与えるかといった教材レベルに立ち戻って子どもの情意を考えていく必要があるのではなかろうか。

②「B. 教師のことば（発問、助言、指示など）や姿勢」にある「意欲的に取り組んでいる姿を目標にするのではなく、意欲的に取り組んでいる姿を、生徒自身が実感し、「自分は意欲的に取り組めたのだ」という自信を持たせること」（93.陣川）をもとにして考えられることは、子どもの内面には質的なレベルがあるということである。つまり、子どもの内面のどの位置に働きかけるのかを教師が意識する必要がある。確かに種々の要因を使うことにより、子どもの情意を高めることは可能であることは各論文からわかる。ただし、問題は子どもの情意がどのレベルであるかということである。つまり、子どもの情意には「楽しそう」「やってみたい」というレベルから、子どもが自分の状態・意識をメタ認知できるような、いわば実感できるようなレベルまでの幅があるということである。その実感できるレベルまでの働きかけのために、どんな要因を、いつ、どのように使うのかを教師が意図的に仕組まなければ表面的な「関心・意欲・態度」になるであろうということである。

5. まとめと今後の課題

国語科授業において、子どもの学習意欲、興味・関心・態度といった情意的側面が喚起される要因は何であることを二誌の国語科教育雑誌をもとに調査した。

その結果、情意が喚起される要因として九つあることがわかった。また、この要因は教材側と教師側の二つに大別され、論文では教師側について詳しく示していることがわかった。また、子どもの情意を高めるための要因ではあるが、大事なことは子どもの内面に響くような要因でなければならないことである。「楽しい」はもちろん大切なことであるが、自分の今の位置を振り返ることのできる状態に、いわば「実感」できる状態にまで深めていけるように教師が仕組むことが必要であることがわかった。

もちろん、課題もたくさんある。今回は一つの論文から主だった要因を一つ取り上げて考察したが、授業の中にはたくさんの要因が入っていることをどう考えるのか。また、一つ一つの要因のもつ質的な成果や効果に具体的に言及しなくてもよいのかなどである。これらについては今後の課題としたい。

注(1) 鈴木誠, 意欲を引き出す授業デザイン, 東洋館出版社, pp.18-19, 2008.

<資料編 論文の題名に「関心」「意欲」「態度」など子どもの情意が示されている研究論文一覧>

1. 加部佐助, 書く意欲と書き方への糸口に, 教育科学国語教育, No.406, 1989.
2. 大熊徹, 児童と教師とが意欲的に書き続けつつある状態, 教育科学国語教育, No.409, 1989.
3. 中洵正堯, 学習意欲 学習態度 学習スタイルの個人差, 教育科学国語教育, No.421, 1989.
4. 浮橋康彦, 興味・関心の個人差, 教育科学国語教育, No.421, 1989.
5. 越前谷あや子, 読書意欲を書く意欲へ, 実践国語研究, No.95, 1990.
6. 出浦登貴子, 書くことを通して意欲的な読みへ, 実践国語研究, No.96, 1990.
7. 久保田政子, 自ら学ぶ意欲を広げる学習課題, 実践国語研究, No.96, 1990.
8. 小森茂, 表現意欲についてどのように取り組むべきか, 実践国語研究, No.96, 1990.

9. 鎌田司, 新聞作りを取り入れて意欲化を, 実践国語研究, No.98, 1990.
10. 小森茂, 表現意欲についてどのように取り組むべきか(2), 実践国語研究, No.98, 1990.
11. 前田千晶, 学習意欲を四十五分持続させる授業を, 教育科学国語教育, 1990.6月号.
12. 川名眞木子, 意欲的に読み深める指導, 実践国語研究, No.427, 1990.
13. 小森茂, 表現意欲と作文の時数確保についてどのように取り組むべきか, 実践国語研究, No.101, 1990.
14. 浜本純逸, 生きる意欲と読む力・書く力, 教育科学国語教育, No.436, 1990.
15. 浜本純逸, 書く意欲を育て書く技術を育てる, 教育科学国語教育, No.440, 1991.
16. 大友裕之, 動機づけと意欲の高まりをめざして, 実践国語研究, No.108, 1991.
17. 四戸千賀子, 書く意欲をもたせるには, 実践国語研究, No.109, 1991.
18. 大熊徹, 関心・意欲・態度を重視した作文指導, 実践国語研究, No.111, 1991.
19. 小野雅子, 想像力を広げ読書意欲を高める工夫, 実践国語研究, No.113, 1992.
20. 仲谷富美夫, 自己の興味・関心を生かした読みの指導, 実践国語研究, No.117, 1992.
21. 野地潤家, 国際化への視野と意欲を, 実践国語研究, No.117, 1992.
22. 柏村政, 自分とのかかわりで読む態度を育てる, 教育科学国語教育, No.463, 1992.
23. 田近洵一, 関心・意欲・態度の評価, 教育科学国語教育, No.468, 1992.
24. 吉田裕久, 「関心・意欲・態度」評価の意義と留意点, 教育科学国語教育, No.468, 1992.
25. 北川茂治, 「関心・意欲・態度」の到達目標, 教育科学国語教育, No.468, 1992.
26. 小田倉稔, 自己評価を生かしながら意欲喚起を!, 教育科学国語教育, No.468, 1992.
27. 八木義仁, 学習スタイルの選択で意欲をもたせる, 教育科学国語教育, No.470, 1993.
28. 戸田和樹, 単元学習が意欲を育てる, 教育科学国語教育, No.470, 1993.
29. 小山恵美子, その子なりの発見や発想を「意欲」につなげる, 教育科学国語教育, No.470, 1993.
30. 野口幸司, 意欲を育てる単元設定の工夫, 教育科学国語教育, No.470, 1993.
31. 野崎憲次, どう読むかで意欲を高める音読指導, 実践国語研究, No.127, 1993.
32. 谷口廣保・須田実, 学習意欲を育てる国語教室づくり1, 実践国語研究, No.127, 1993.
33. 伊藤スジコ, 必要感と意欲を引き出すテーマ, 教育科学国語教育, No.474, 1993.
34. 小和田仁, 学ぶ意欲を育てる発問・指示, 実践国語研究, No.128, 1993.
35. 有村隆志, 学習に関心を持ち参加したがる発問を, 実践国語研究, No.128, 1993.
36. 成田雅樹, 機能的発問で持続する意欲を, 実践国語研究, No.128, 1993.
37. 谷口廣保・須田実, 学習意欲を育てる国語教室づくり2, 実践国語研究, No.128, 1993.
38. 湊吉正, 関心・意欲・態度, 教育科学国語教育, No.478, 1993.
39. 大越和孝, 関心・意欲・態度, 教育科学国語教育, No.478, 1993.
40. 岩崎保, 関心・意欲・態度を国語科授業でどう育てるか..., 実践国語研究, No.130, 1993.
41. 丸山英二・須田実, 関心・意欲・態度を育てる学習活動, 実践国語研究, No.130, 1993.
42. 有田和正, 「聞き方」の態度をどう指導するか, 教育科学国語教育, No.479, 1993.
43. 梅澤実, 関心・意欲の育成からとらえ直す説明文の読解の授業, 教育科学国語教育, No.480, 1993.
44. 杉田知之, 意欲が育つ「助言」を準備する, 教育科学国語教育, No.480, 1993.
45. 喜岡淳治, 「類語」に対する関心・意欲を育てる〈授業準備法〉, 教育科学国語教育, No.480, 1993.
46. 蛭川由起子, 興味のある題材で意欲をもたせる, 実践国語研究, No.132, 1993.
47. 高田節子, 伝達意欲を高める作文指導と評価, 実践国語研究, No.132, 1993.
49. 満田幸四郎, 関心・意欲・態度を段階的, 重点的にとらえる, 実践国語研究, No.132, 1993.
49. 古庄敏美, 短歌・俳句への関心を高める一つの試み, 実践国語研究, No.132, 1993.
50. 槇田健, 「関心・意欲・態度」も支援する, 教育科学国語教育, No.483, 1993.
51. 波越宏子, 進んで読みとる態度を育てる, 教育科学国語教育, No.483, 1993.
52. 安原由美子, 表現意欲を高める音読指導, 実践国語研究, No.134, 1994.
53. 中野まどか, 意欲をもって確かに話すことの指導, 実践国語研究, No.135, 1994.
54. 中村敏男, 言葉への興味・関心を手がかりに, 実践国語研究, No.135, 1994.
55. 藤原宏, 意欲的に表現活動に取り組ませる工夫, 実践国語研究, No.135, 1994.
56. 八田洋彌, 学習への関心・意欲・態度を育てる発問の意味, 教育科学国語教育, No.490, 1994.
57. 野口芳宏, 学習意欲を生む原理, 教育科学国語教育, No.490, 1994.
58. 戸根由子, 学習課題に意欲的に取り組ませる指導, 実践国語研究, No.138, 1994.

59. 藤原宏, 学習意欲の溢れる指導過程の展開, 実践国語研究, No.138, 1994.
60. 庭野三省, 複数教材で子供の興味・関心を引き出す, 教育科学国語教育, No.493, 1994.
61. 平松敏明, 書く意欲を引き出す短作文指導, 実践国語研究, No.140, 1994.
62. 藤原宏, 言葉に対する関心を育てる指導, 実践国語研究, No.140, 1994.
63. 緒方浩二, 学習意欲を高め, 学習の必要性に応える学校図書館の活用, 教育科学国語教育, No.500, 1994.
64. 渋谷孝, 「関心・意欲・態度」評価の問題点, 教育科学国語教育, No.500, 1994.
65. 本堂寛, 育てるものとしての関心・意欲・態度, 教育科学国語教育, No.501, 1994.
66. 瀬川榮志, 客観性のある「関心・意欲・態度」の評価資料の作成と活用, 教育科学国語教育, No.501, 1994.
67. 小山恵美子, 学習活動の交流を通して「意欲」を見取る, 教育科学国語教育, No.501, 1994.
68. 吉原良治, 学習展開を工夫することで子供の関心・意欲・態度を高める, 教育科学国語教育, No.501, 1994.
69. 松田敦美, 「関心・意欲・態度」を高める計画的な指導を, 教育科学国語教育, No.501, 1994.
70. 遠藤瑛子, 学習者の関心・意欲・態度を指導に生かす「今日の感想」, 教育科学国語教育, No.501, 1994.
71. 小田迪夫, 関心・意欲のエネルギーの向けどころ, 実践国語研究, No.144, 1995.
72. 深川明子, 発問・指示を超えて一教師の意欲が問われる一, 実践国語研究, No.144, 1995.
73. 中西一彦, 三つの対話から関心・意欲を, 実践国語研究, No.144, 1995.
74. 三浦建成, 話しことばに関心をもつ指導の工夫, 実践国語研究, No.146, 1995.
75. 深川明子, 「関心・意欲・態度」の評価との格闘, 教育科学国語教育, No.506, 1995.
76. 岩崎保, 意欲的・主体的に学習できる確かな国語力を育てる, 実践国語研究, no.148, 1995.
77. 高橋俊三, 群読で, 表現への関心・意欲を育てるとは, 教育科学国語教育, No.509, 1995.
78. 井上久, 興味・関心を引き, しかも学力をつける, 教育科学国語教育, No.514, 1995.
79. 吉田裕久, 学習意欲に点火し, 実質的な学習をスタートさせる導入, 教育科学国語教育, No.516, 1995.
80. 桑原雄二, 子供の関心・意欲が育つ作文学習活動の導入, 教育科学国語教育, No.516, 1995.
81. 楠瀬千夏, 教材を越えた関心・意欲を育てる, 教育科学国語教育, No.516, 1995.
82. 眞瀬敦子, 単元を貫く関心や意欲の持てる導入を, 教育科学国語教育, No.516, 1995.
83. 小林一明, 既習の学習で高めた意欲を次の学習の導入にする, 教育科学国語教育, No.516, 1995.
84. 植村敏視, 「関心・意欲」は充実・成就の体験の中で育つ, 教育科学国語教育, No.516, 1995.
85. 宮寄信仁, 喜びの体感のまとめと関心・意欲を呼ぶ導入の往復を, 教育科学国語教育, No.516, 1995.
86. 谷口茂雄, 興味・関心を大切にしたい自覚的課題追究学習の工夫, 教育科学国語教育, No.520, 1996.
87. 井上正明, 子どもの学習指導に役立てる「関心・意欲・態度」, 教育科学国語教育, No.522, 1996.
88. 広瀬節夫, 学習行為に支えられた「学習意欲」の自己評価を, 教育科学国語教育, No.522, 1996.
89. 蟹沢幸治, 音読発表で学習意欲を増す, 教育科学国語教育, No.523, 1996.
90. 山本晴夫, 子どもの関心・意欲が生きる発表会を, 教育科学国語教育, 1996.4月号.
91. 大熊徹, 学習への意欲と自信を育てる指導・支援に関する一考察, 実践国語研究, No.159, 1996.
92. 大越和孝, 意欲は直接指導できるのか, 実践国語研究, No.159, 1996.
93. 陣川桂三, 意欲的な学習から意欲を育てる学習へ, 実践国語研究, No.159, 1996.
94. 迫勲, 自ら学ぶ意欲を育てる授業づくり, 実践国語研究, No.159, 1996.
95. 大久保清人, 子どもの意欲と自信を育てる「選択交流学习」, 教育科学国語教育, No.526, 1996.
96. 緒方浩二, 音声言語活動で, 意欲を高める作文指導, 実践国語研究, No.161, 1996.
97. 廣瀬久忠, 聞く・話す意欲を育てる読みの授業, 実践国語研究, No.161, 1996.
98. 鬼塚悦子, 短作文指導における表現意欲の喚起, 実践国語研究, No.163, 1996.
99. 笹塚幸子, 意欲的に学習に取り組む指導法の工夫, 実践国語研究, No.163, 1996.
100. 藤原宏, 意欲を育てる指導の工夫, 実践国語研究, No.163, 1996.
101. 森岡信行, 書く意欲を大切にしたい作文指導, 実践国語研究, No.165, 1996.
102. 小林由美子, 意欲的に文章表現する生徒を目指して, 実践国語研究, No.165, 1996.
103. 藤原宏, 書くことに意欲をもつ工夫, 実践国語研究, No.165, 1996.
104. 井上正明, 「生きる力」の根底としての「関心・意欲・態度」の評価, 教育科学国語教育, No.539, 1997.
105. 大熊徹, 指導と一体化した関心・意欲・態度の評価, 教育科学国語教育, No.539, 1997.
106. 南雲成二, 「関心・意欲・態度」の評価を行いながら個に即した学習支援を展開, 教育科学国語教育, No.539, 1997.
107. 中村亨, 意見交流を活用した「関心・意欲・態度」の評価方法, 教育科学国語教育, No.539, 1997.
108. 佐野正俊, 自己評価, 相互評価で「関心・意欲・態度」を評価し学習意欲を育成, 教育科学国語教育, No.539, 1997.

109. 川又健司, 学習活動の工夫で子どもの意欲を引き出す, 教育科学国語教育, No.543, 1997.
110. 村田伸宏, ディベートの支援の工夫で意欲を高める, 教育科学国語教育, No.543, 1997.
111. 山本章, 興味・関心を喚起する題材を発掘し学習課題を絞る, 教育科学国語教育, No.545, 1997.
112. 佐藤公, 関心を短作文に結ぶ, 教育科学国語教育, No.545, 1997.
113. 吉永幸司, 技能の習得と意欲を評価する, 教育科学国語教育, No.545, 1997.
114. 東和男, 子供の表現意欲を大切にしたい読書指導, 教育科学国語教育, No.548, 1997.
115. 桜沢修司, 児童の表現意欲を主体に授業を構成する, 教育科学国語教育, No.549, 1997.
116. 船水周, 表現意欲を引き出す短歌づくりの実践, 実践国語研究, No.177, 1997.
117. 杉田知之, 描写を読む態度が育たない, 教育科学国語教育, No.554, 1998.
118. 釧持勉, 意欲を持って主体的に学ぶ国語科の授業, 実践国語研究, No.181, 1998.
119. 小林克宏, 単元を貫く関心・意欲を高める, 教育科学国語教育, No.557, 1998.
120. 松山美重子, 「伝えること」への意識と意欲, 実践国語研究, No.197, 1999.
121. 庭野三省, 精読中心の授業では「読書に親しむ態度」は育たない, 教育科学国語教育, No.563, 1998.
122. 橋本慎也, 楽しんで読もうとする態度を育てる, 教育科学国語教育, No.563, 1998.
123. 伊藤雅亮, 読書意欲と習慣化の視点からのネタ, 教育科学国語教育, No.563, 1998.
124. 山崎玲子, 学ぶ意欲を育てる学習記録の作成, 教育科学国語教育, No.572, 1999.
125. 府川源一郎, 読書に親しむ態度を育てる授業づくりの課題, 教育科学国語教育, No.574, 1999.
126. 小林一仁, 学習者の意欲喚起, 成就の喜びを, 教育科学国語教育, No.579, 1999.
127. 中島聖巳, 生徒が意欲を持って取り組む言語学習, 実践国語研究, No.201, 1999.
128. 品川正, 「対話」の意欲を育てる授業とは!, 教育科学国語教育, No.594, 2000.
129. 棚橋尚子, 子どもの読書意欲をひきだすブックトークのありかた, No.597, 2000.
130. 佐藤浩二, 指導のし過ぎは意欲を高めない, 教育科学国語教育, No.597, 2000.
131. 森島久雄, 初めに読書意欲の喚起あり, 教育科学国語教育, No.598, 2000.
132. 高松亮輔, 学ぶ意欲を刺激する為の朗読始動, 実践国語研究, No.203, 2000.
133. 吉永幸司, 「書くこと」を支える学習意欲, 実践国語研究, No.221, 2001.
134. 伊藤和子, 学習過程で評価し意欲を引き出す, 教育科学国語教育, No.611, 2001.
135. 市毛勝雄, 課題意識・学習意欲の重視について, 教育科学国語教育, No.613, 2001.
136. 古村真理子, 意欲的に話し合い, 考えるおもしろさを実感する学習, 実践国語研究, No.227, 2002.
137. 宗我部義則, 具体的な目標能力(技能・態度)を設定して評価の観点に活かす, 教育科学国語教育, No.618, 2002.
138. 高左右美穂子, 意欲的に書くための指導, 実践国語研究, No.231, 2002.
139. 植山俊宏, ことばに対する意欲・納得の意欲の重視, 教育科学国語教育, No.620, 2002.
140. 西田拓郎, 「関心・意欲・態度」を大切にしたい魅力的なことばの学習を, 教育科学国語教育, No.623, 2002.
141. 梅本雅典, 伝え合うことによって意欲を高める, 実践国語研究, No.239, 2003.
142. 益地憲一, 関心・意欲・態度の評価は授業改善に直結, 教育科学国語教育, No.629, 2003.
143. 伊庭郁夫, 態度・工夫・記述で到達度評価をする, 教育科学国語教育, No.630, 2003.
144. 井関和代, 子どもの意欲を引き出す八つの手だて, 教育科学国語教育, No.632, 2003.
145. 佐藤洋一, 学習者個々の多様性と言語技術―「関心・意欲・態度」の位置づけ―, 教育科学国語教育, No.634, 2003.
146. 増田信一, 子どもの読書興味を持続させる周囲の配慮が不可欠だ, 教育科学国語教育, No.635, 2003.
147. 神明照子, 子どもの意欲を大切にしたい系統的指導, 実践国語研究, No.246, 2003.
148. 岸田薫, 書く意欲の持続する招待状, 実践国語研究, No.246, 2003.
149. 栗本郁夫, 取材・選材, 書き方の指導で書く意欲を高める, 教育科学国語教育, No.639, 2003.
150. 中村泰夫, 自ら学ぶ意欲を育てる指導, 実践国語研究, No.250, 2004.
151. 有働玲子, のびのびした地声は「伝えたい」という意欲から生まれる, 教育科学国語教育, No.640, 2004.
152. 栗本郁夫, ペアチェックで読みの意欲を高め合う, 教育科学国語教育, No.640, 2004.
153. 鈴木悟志, 意欲を段階的に高める学習システム, 教育科学国語教育, No.642, 2004.
154. 野口芳宏, 「不満の自覚」と「打開の意欲」と「向上の自覚」, 教育科学国語教育, No.643, 2004.
155. 藤島保奈美, 読む意欲を高める図書館教育, 実践国語研究, No.254, 2004.
156. 大河内義雄, 幅広く読書する態度を育てる, 教育科学国語教育, No.647, 2004.
157. 平塚昭仁, 補充的指導は, 「反復」と「学習意欲」, 教育科学国語教育, No.648, 2004.
158. 石川憲一, 伝え合う意欲を意識した評価基準の吟味, 実践国語研究, No.260, 2004.

159. 西辻正副, 書く意欲をもたせるために, 実践国語研究, No.260, 2004.
160. 兵藤伸彦, 思考力・判断力と意欲を高める, 教育科学国語教育, No.650, 2004.
161. 中西一弘, 意欲をもやして活動してもらうために, 教育科学国語教育, No.655, 2005.
162. 大林克暢, 「国語への関心・意欲・態度」を重視する, 実践国語研究, No.265, 2005.
163. 田上幸雅, 学習意欲の喚起と学力形成のために, 教育科学国語教育, No.658, 2005.
164. 橋本大輔, 興味・関心を課題へ高める手だて, 実践国語研究, No.269, 2005.
165. 高橋俊三, 表現への意欲と他者への意識を, 教育科学国語教育, No.663, 2005.
166. 生杉智明, 主体的・意欲的にできる活動を目指して, 実践国語研究, No.278, 2006.
167. 牧野守, 書く意欲と確かな書く力を高める, 実践国語研究, No.280, 2007.
168. 崎山泉, 「意欲的に書く」授業を目指して, 実践国語研究, No.282, 2007.
169. 松山美重子, 意欲・目的意識をもたせる導入学習, 実践国語研究, No.282, 2007.
170. 細見博友, 子どもの読書意欲を高めるために, 実践国語研究, No.287, 2008.
171. 長崎伸仁, 新たな学力観としての「習得 活用」そして「学習意欲」, 教育科学国語教育, No.691, 2008.
172. 吉本清久, 子供の学習意欲を持続させる教材開発を, 教育科学国語教育, No.706, 2009.
173. 清水由美, 伝え合う意欲を「読み」から広げる, 教育科学国語教育, No.706, 2009.